



# 西前小だより

横浜市立西前小学校

Web:<http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/nishimae/>



## 「いのち」の食べかた 一給食週間に寄せて

校長 末松 隆一郎

肌を刺す寒風吹きすさぶ日々ではありますが、凍てつく地の下では、春の支度が着々と進み始める頃となりました。眩しさに気がつけば、陽の光は強さを増し、日射しは一日に畳の目ひとつ分ほど伸びています。まさに春隣（はるとなり）の頃、かすかな春の予兆に目を向けては、暖かな季節に思いを馳せる今日このごろです。

1月24日から1月30日まで、全国学校給食週間でした。西前小学校でもこれを受け、1月19日からの週を校内給食週間とし、給食委員会による全校集会が行われました。楽しい劇やクイズを通して、とてもわかりやすく「食べる」ことの大切さや健康との関わりについて発表してくれました。そして、私からは全校朝会で「食べる」ということについての話をしました。

<b>12~15</b>
<b>6~7</b>
<b>2</b>

この3つの数字は、ある動物の寿命です。私たちにとっても身近な動物です。実はこれは、牛の寿命を表しています。ではなぜ、寿命が3つもあるのでしょうか。

牛は、本当はみんな、12年から15年位は生きるそうです。つまり生まれてからやがて大人の牛になり、年をとって死ぬまで、12年から15年位が一般的な寿命とされています。

雌の牛は、毎日給食で飲んでいる牛乳やバター、チーズのもとになるお乳をだしてくれます。しかし、だいたい6年から7年経つともうお乳がでなくなり、乳牛としての役目を終えます。役目を終えた乳牛は、食用肉として出荷され、お肉となります。

最後に2という数字、これは雄牛の寿命です。雄牛は生まれて大体2年で大人の牛になります。雄牛は生まれて2年位で、私たちが食べるお肉になるために、一生を終えます。こう考えると牛乳にもお肉にも「いのち」が関わっていることがわかります。そして、私たち人間は、自分たちが生きるためにその「いのち」をいただいているのです。

もう一つわかって欲しいことがあります。それは、牛を飼育している方々は、家族同様に可愛がりたっぷりの愛情をかけて大切に育てているということです。授産施設の畜産部にいた私の友人から聞いた話ですが、出荷用のトラックに牛を入れる時、目が合った後、牛が進んでトラックに入っていく姿に、毎回涙が止まらなくなってしまいました。心を込めて育てている人たちの思いも詰まっていることを、私たちは忘れてはいけないと思います。

牛だけでなく、豚も、鳥も、魚も、お米でも、野菜でも、天から与えられたいのちの長さがあります。それを、私たち人間が食べ物にするため、いのちを途中で終わらせているのですね。私たちは食べ物をいただくとき、そのいのちを引き継いでいくという気持ちをもたなければいけないと、あらためて感じます。私たちは、自分のいのちのもとになっている食べ物を大切に思い、しっかりと食べて、無駄にしないことが大切です。

いのちを引き継ぎ、しっかりと自分の血や肉にしていくという気持ちを、「いただきます。」という言葉に込めてほしいと思います。



最後に、森達也さん著「いのちの食べかた」（角川文庫）のあとがきの一節を記させていただきます。この機会に、毎日の食事にあらためて感謝し、ご家庭でもぜひこの話を話題にしていただければと思います。

**「あなたが今食べようとしているのはいのち。誰かが殺したいのち。その誰かは僕でもあるしあなたでもある。そう思いながらいのちを食べよう。噛みしめよう。その上で思う。いのちのことを。たくさんの人のことを。自分のことを。」**

